

氏 名	こ ばやし さとる 小 林 知
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 39 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	ポ ル ・ ポ ト 時 代 以 後 の カ ン ボ ジ ア に お け る 地 域 社 会 の 復 興 —— ト ン レ サ ー プ 湖 東 岸 地 域 の 事 例 ——

論文調査委員 (主 査)
教 授 小 林 行 夫 教 授 杉 島 敬 志 教 授 田 中 耕 司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、2000年3月から2002年4月にかけて、カンボジアのコンボントム州コンボンスヴァーイ郡サンコー区において実施した定着調査で得た資料に基づき、ポル・ポト時代以後復興した同地域社会の諸相を、村落社会の編成、農地所有、生業活動、経済格差および宗教活動から記述・考察したモノグラフである。

第一章は、カンボジアの農村社会を中心とする先行研究の意義と問題点を批判的に検討し、本論文の課題と視点および方法を示す。

第二章は、カンボジアの国土と近現代史を概括し、調査対象地域であるトンレサープ湖東岸の生態環境、地域社会の概要を述べる。

第三章は、調査地域内の集落群の地理的、社会的な編成とその歴史的経緯を述べる。聞き取りで得た口述資料から、内戦下で始まる強制移住によって住民が集落から放逐された経緯、その後のポル・ポト政権が実施した上意下達式の社会管理と政策の内容、ポル・ポト時代以後の集落再編の時期と過程を解明する。同時に、内戦とポル・ポト政権の支配という未曾有の政治・社会的混乱を経験した後も、集落の再編過程で結婚後の妻方居住傾向が明瞭にみられたことから、妻方親族どうしの紐帯が、今日も日々の社会生活のなかで持続し、かつ機能していることを指摘する。

第四章は、ポル・ポト時代に生じた農地所有権の白紙化および農地景観の変容と1979年以後に農地所有権が再定位された過程を考察する。ポル・ポト政権の後継の社会主義政権が設けた集団農業生産体制（クロムサマキ）が、政府による指導にもかかわらず、いち早く解散されていたこと、さらに、その解散時に行なわれた農地分配が、慣習法的な土地占有権の認識に基づきつつ世帯間の平等を意識して行なわれていたことを跡づけた。農地分配に関する以上の分析から、ポル・ポト時代以後の農業活動の再編が、国策の介入と一線を画しつつ、地域社会内の独自の秩序の下で進められてきたことを明らかにする。

第五章は、住民の生業活動と世帯の家計の現状について、不安定な米生産の概況と稲作以外の生業を中心に論じる。飯米確保に苦勞する住民が暮らしを向上させようとする様々な方法と実態を明らかにするとともに、近年急増した出稼ぎ人口から、調査対象地域の今日の社会経済的変化を記述する。

第六章は、地域社会内の世帯間、村落間の経済格差の現状と背景を考察する。調査対象地域では、稲作や漁業ではなく、商業従事者が富裕な世帯となっている。また、市場から近い村と遠い村という地理的配置のうえに村落間の経済格差が顕われている。さらに、今日の富裕世帯の多くは、内戦前に商業活動の経験を持つ人物が、ポル・ポト時代以後にいち早く同種の活動を再開し富を蓄積したものであり、今日の経済格差は、地域住民が内戦以前に築いていた知識や経験の有無によって方向づけられていることを指摘する。

第七章は、仏教寺院を中心とした住民の宗教活動を、サマイ（新しい）とボーラーン（古い）という二つの仏教実践を軸に記述する。サマイとは、20世紀初頭に、カンボジア仏教の制度化の過程で首都の学僧が創始した合理主義的な実践で、調

査地周辺にはすでに1940年代に導入され、ポーラーン（伝統的な実践）の支持者との間に葛藤を引き起こしていた。ボル・ポト時代以後の1990年代には、調査対象地域の多くの寺院で若い僧侶がサマイを受容したが、その背後には、ボル・ポト政権下での宗教活動の断絶経験、さらにはその後の社会主義政権が1979～89年に行った出家行動に関する統制があり、地域住民の仏教実践が、国家が定める宗教の制度化の影響下で再編されてきたことを明らかにする。

第八章は、住民が仏教寺院を舞台にして行なう諸活動を、ボル・ポト時代に破壊された寺院建造物の再建事業を中心に述べ、それらの活動が現在進行中の文化再編の過程にあるものとして考察する。カンボジアの仏教寺院は、功德の獲得を願う者すべてを参加者として受け入れる。そして、農村の寺院の多くは市場や都市に居住する信徒との交流から資金を獲得し、再建事業を進めようとしてきた。一方で、そのような活動に参加する人々の間には、近年の歴史的経緯がもたらした儀礼伝統に関する年長者と若年者の見解の相違や、地域社会の内外に生じた経済格差による参加者の生活様式と感覚のずれが観察される。すなわち、寺院での活動が、年長者と若年者、富裕者と貧困者という世代や社会階層を異にする参加者がそれぞれの認識や立場の違いを顕在化させ、時に葛藤や緊張関係を表面化しつつ営まれていることを記述する。

以上のように、本論文は調査対象地域に暮らす住民の日常生活の諸局面を詳細に記述するとともに、現状分析にとどまらず、それぞれの現実を内戦以前にあった地域社会の歴史的文脈と、とりわけ内戦勃発以降に人々が直面した経験とを照らし合わせて分析することによって、ボル・ポト時代以後の地域社会の復興と文化再編の動態を明らかにした。同時に、ボル・ポト時代以後に進められてきた復興が、住民の母村への帰還と彼（女）らがボル・ポト時代以前の生活のなかで培っていた知識や経験を動員して行なう諸活動に基づいていることをも実証した。

論文審査の結果の要旨

本論文の学術上の貢献は、冷戦体制と内戦を挟んで現地調査が長らく不可能であったカンボジア農村において、長期にわたる定着調査を実施し、ボル・ポト政権を経験した特定地域の社会と文化の復興を、集落編成や農地所有、生業と宗教など、住民の日常生活を構成する諸局面から跡づけ、その過程を地域の歴史的文脈および内外の社会変化と関連づけて記述・分析したことにある。

以下、本論文の注目されるべき主要な評価の三点について要約する。

第一に、本論文はカンボジア社会の実証的研究の長い空白を埋める重厚な基礎研究である。カンボジア農村社会の調査研究は、半世紀近く前のわずかな成果が残るのみであった。他方で、近年の多くの研究は、開発援助政策に直結する応用研究が先行したため、カンボジアを「被災者」社会として捉え、短期訪問調査に基づく現状分析に終始した。加害者と被害者という構図を超えて、住民の語りから地域の復興過程を丹念に掘り起こした本論文の意義は、何よりも、内戦とボル・ポト政権の時代が、住民にとって個々に異なる経験であったことを明らかにするとともに、日常生活を形づくる諸局面を、地域の歴史的時間のなかで再構成した点にある。すなわち、昨今の内外のカンボジア研究はもとより、自己完結的で統合的に社会と文化を描く旧来のコミュニティ・スタディとも異なる、パイオニア的な研究成果である。このことは学術的に高く評価される。

第二に、学際的手法を意識して収集された集落の編成過程、農地所有、生業、経済格差および宗教活動に関する、質・量ともに厚みのある詳細な基礎データとその学術的意義である。本論文は、カンボジア語の習得にはじまる、周到に準備された留学と、長期間にわたる住み込み調査で築かれた、立場の異なる多くの人々と申請者との信頼関係を踏まえている。現地語を駆使して得られたデータは、同時に、誠実で粘り強い観察と洞察に裏打ちされたものであり、異なる分野からカンボジアを研究する専門家はもちろん、他地域の研究者にとっても、その精度とともに高い資料的価値をもつものである。

第三に、本論文を独創的なものに行っているのは、定着していた村のみならず、複数の集落を視野に入れて、調査対象地域の歴史を浮き彫りにしたことである。とりわけ、それぞれの住民が申請者に語り聞かせた記憶を紡いで浮き彫りにされた集落ごとのエクソダスの経緯と、その後の集落再編過程の記述と考察は、内戦とボル・ポト政権の時代を生き抜いた人々の経験を、鮮やかに再現することにつながった。その基本的な内容は、本論文の重要な礎をなしている。そして、人々が集落を再編し、農地を再獲得した過程において、妻方居住慣行をもつ地域社会の妻方親族集団の協同や紐帯が大きく作用していることも明らかにされた。このように、個人を核とする社会関係の継承と持続の様態を明らかにした点で、本論文の手法は、

紛争や内戦を経験した他の社会の研究にとっても貴重な貢献を果たしている。

本論文には、復興の過程を具体的に示す生活の諸局面に関する基礎データのみならず、今後のカンボジア社会研究を推進させるうえで、見過ごすことのできない貴重な記述と考察が豊富にもりこまれている。村境や県境を越えて展開される人々の活動を追い、定着した集落とその周辺の集落を、より広い地域の文脈から照射しようとした考察、あるいは商業活動の現実や、仏教寺院を舞台にして組織される集合的な儀礼活動についての観察は、今日のカンボジア地域社会の動向を生き生きと伝えている。そして、地域社会の復興が、所得などの経済的な諸指標の領域が示すような単線的なものではなく、過去に築かれていた社会関係や慣行を資源としつつ展開されてきたこと、さらに宗教活動をはじめとする文化の再編も、経済格差が広がる現在にあっては、矛盾と競合関係を孕みつつ進行していることが、多様化する生業や寺院復興事業の記述を通して明らかにされている。

すなわち、本論文は、調査対象地域の住民の暮らしを構成する諸局面について、定着調査をとおして渉猟したデータに基づく克明な記述からなっている。また、それぞれの局面の現実を口述資料が浮びあがらせた内戦以前の地域の歴史的な文脈から分析することにより、ポル・ポト時代以後の地域社会の復興を立体的に跡づけ、さらには現在進みつつある文化再編の様相をも明らかにした。地域が刻印する歴史とその動態を、住民がそれぞれに経験する多元的な現実から対象化した本論文は、カンボジア農村社会研究の空白を補うにとどまらず、東南アジア地域社会の実証的研究に新たな展望を拓くものとなっている。

以上のように、申請者の本論文は、本研究科にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果として判断される。また、本論文の前提となった諸論文は、和文のみならず、英語の学術論文としても国際学会で公表され、高い評価を受けている。

よって、本論文を博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年1月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。